

訪問系介護サービスで就労する外国人介護福祉士が就労を継続するプロセス

—M-GTAによる外国人介護福祉士のインタビューの分析—

○東北福祉大学 氏名 二渡 努 (006727)

伊藤 優子 (龍谷大学短期大学部・006527)、奈良 夕貴 (NTT データ経営研究所・010090)、

岡田 泰治 (早稲田大学人間科学研究科 松原研究室・009817)

キーワード：外国人介護福祉士、訪問系介護サービス、就労継続

1. 研究目的

介護分野において介護人材確保の観点から外国人介護人材の活用が進められており、在留資格「介護」をはじめ、「技能実習」、「特定技能」により外国人介護人材が介護現場で就労している。これまで訪問系サービスは指導体制の確立が困難である等の理由から「技能実習」や「特定技能」は就労が認められていなかったが、介護人材不足の背景から「外国人介護人材の業務の在り方に関する検討会」(厚生労働省)において、外国人介護人材の訪問系サービスの就労要件を緩和する方向性が示された。しかし、外国人介護人材の訪問系介護サービスに関する知見は十分に蓄積されているとはいえない状況である。

そこで本研究は、訪問系介護サービスで就労している外国人介護福祉士が就労を継続するプロセスを明らかにすることで、訪問系介護サービスにおける外国人介護職員の定着促進や参入促進、介護サービスの質の担保に資する知見を得ることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究は、社会的相互作用に関わる内容であり、ヒューマンサービス領域に該当し、プロセス的性格を有することから、木下(2003)の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を採用し、分析テーマを「訪問系介護サービスで就労する外国人介護福祉士が就労を継続するプロセス」、分析焦点者を「訪問系介護サービスで就労する外国人介護福祉士」と設定した。

対象者として分析焦点者に合致する者を機縁法によって選定し、調査目的を説明した上で同意が得られた7名(訪問介護3名、訪問入浴2名、小規模多機能型居宅介護2名)に2024年5月から6月にインタビュー調査を行った。インタビューガイドとして、①現在のサービス種別で働こうと思った理由、②現在のサービス種別の良い点、③現在のサービス種別で働いて不安なことや困ったこと、④職場にお願いして対応してもらっていること、⑤これまでの仕事との違いや今後の仕事の希望、を設定し、一人60分程度の半構造化面接を行った。対象者の同意を得て録音した音声データから作成した逐語録を読み込み、概念名、定義、バリエーション(具体例)、理論的メモで構成される分析ワークシートを作成し、概念生成を行った。概念の関連性の検討等を行い、結果図とストーリーラインを作成し、新たな概念生成ができないことをもって、分析結果が理論的飽和化に至ったと判断した。

3. 倫理的配慮

研究協力者に対して文書と口頭により研究内容とプライバシーの保護、匿名化について説明し、同意書への署名・捺印を求めた。また、同意後であっても、同意撤回書の提出をもって、撤回可能である旨を文書と口頭で説明した。研究協力者の日本語能力が十分でないことを想定し、研究内容説明書と同意依頼は、わかりやすい日本語で作成した文章にルビを振ったものを用いて説明した。

本研究は東北福祉大学の研究倫理委員会により承認を得ており、研究倫理上の必要な手続きを経ている（受付番号：RS240201）。また、本報告は日本社会福祉学会研究倫理規程にもとづく研究ガイドラインを遵守しており、本報告に際し、共同発表者の承諾を得ている。なお、本報告に関連し、開示すべきCOI関係にある企業等はない。

4. 研究結果

生成したカテゴリーは<>、概念は“ ”としてストーリーラインを以下に記す。

訪問系介護サービスは、利用者の居宅であるプライベート空間において、少人数の介護職員がサービスを提供するという特性を有する。外国人介護福祉士が訪問系介護サービスで就労を継続するプロセスとして、まずは“利用者・家族への外国人介護職員によるサービス提供の同意”、“利用者・家族への宗教上の配慮への理解を得る”という<職場のマネジメント>が必要となる。就労開始後は、“介護業務の習得”、“コミュニケーション能力の習得”、“日本文化の理解”の<業務遂行能力の習得>と、それらの習得をサポートする“OJT”、“すぐに質問できるツールの整備”である<職場の教育・相談体制>の両者の好循環により、<業務内容への適応>が可能となる。これにより、<業務内容と自分のマッチング>が実現することで、外国人介護福祉士はやりがいをもって訪問系介護サービスの就労を継続することが可能となる。

5. 考察

本研究により明らかとなった訪問系介護サービスに従事する介護福祉士の就労継続プロセスは、宗教上の配慮と日本文化への理解が必要である点が特徴的であると考えられる。訪問系介護サービスの特徴である調理や家族とのやりとりを通して成長することにやりがいを感じたり、夜勤業務がないことが自身のライフスタイルに適合するなど、自身が就労するサービス種別の業務内容と自分のマッチングを実現させることが就労継続に重要な要因であると考えられる。今後の課題として、本研究は外国人介護福祉士を対象としたが、今後は分析対象者による差異も考慮して研究を進めていく必要があると考えられる。

文献

木下 康仁 (2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』弘文堂.